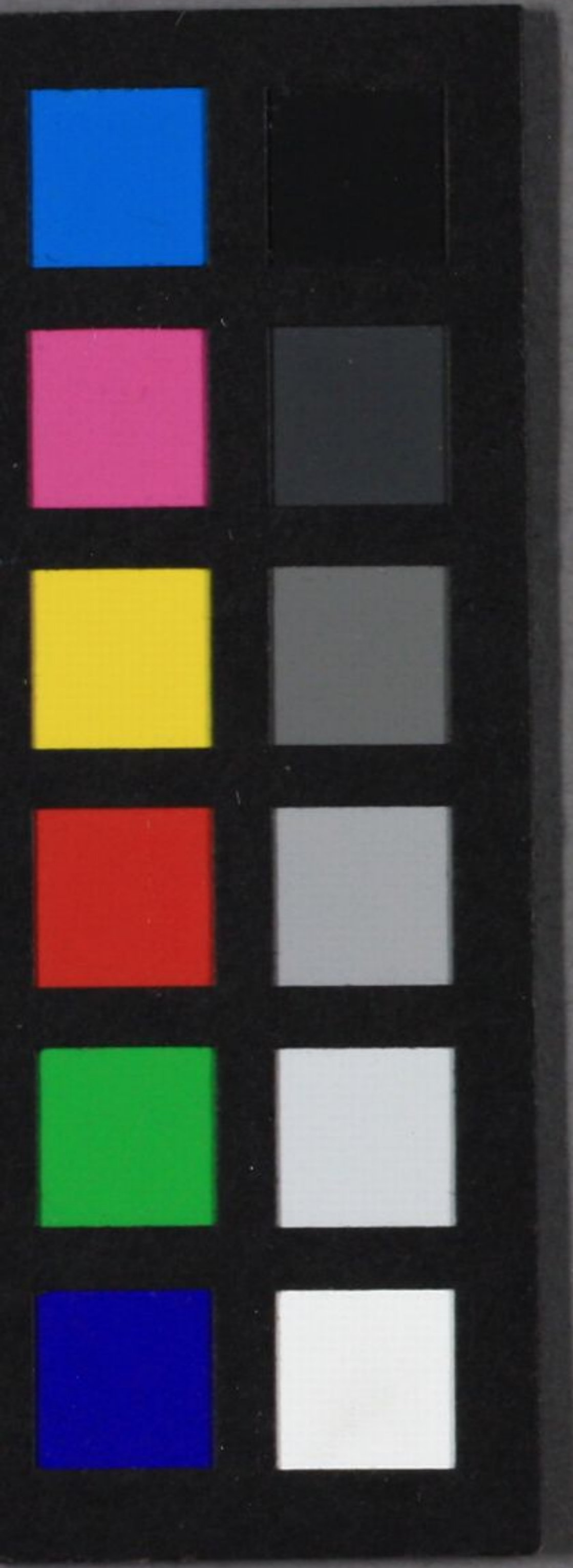


古今和歌集

後白河院
機訂
下





古今和歌集卷第十一

恋歌一

歌一

ちかきいさくやさ月のわやめさほやめとまらぬ恋とすや
 ちかきのこまきのあさき路よるいかまそとむら思ひよおひげぬじ
 よし野にいの浪言くゆあのをやくど人ともひを先とし
 ちかき浪のあとさきうらた由くせも風どたりの志るさありりる
 かを山根とよまこつあさうらの関の志るに身をふるあさ
 ちかきうらあをねど思すたまも人よんをかきうらうら皮
 世中かくこそあられ吹がせの先よぬ人もこひかきりり
 右近のうすまをのむを里の目むらひたてしりこなる
 車の下すげれよ里。女のうほのふのうよ見えなれば
 よみくはらをりしきる

よこ人
 素性
 表之
 橋際
 元方
 法
 ちかき
 ちかき
 ひり

とらねくを愛よと人をとあるよあわしたの麻だおきうかき
偽のあまごをせいかうと志のひま袖を志あうさうま
祐よなきてむぢあかると志あよねき神と志をとおえむ
まがわしく物やあねもほときけ時たとも物く教ただん
さ法さ山指をたうとわとあひたなくねをある志と出るうか
林を務めたる時あまといたちおの志もかひやえ物くよ
むしのごとこ志またといあかねと涙のここと下にたがるき
是れみみこの家のいふ念のうと

歌一七

あまの誓まみねねさるものたのちなきに物を思ふことわら
むとつと物とあひに林の田のいさをのそよといふ人のあま
人を思ふにいうまよわねども志あまのみもなきにうら
林うせまかき物すあとのこ志まき人をうねく人のあひにがうむ

素性
ふぢあかの
たがき
ふ
かき
けがき
ま法祐
ふうま

おこむらう涙のたまをあふれにうまよりまにゆきさうま
やまねいよは情なる人よまきけり

あえぬまのうらげのあめさうむ人のうらむのこねさうま
やうひをうらまに物めうらうびなる人のあひに女人あま
こけうらまをさうまうらうまみてはうらうら

歌一八

こら志まうらぶの山のほらむまれくちらも枝の中はら
まにのうらうらまら志まねや下に志科て志まらま
たきらまに物まらまねうらまのうらまら志まねす
よひよねまら我ねるかまなかけて思まぬ時のまま
志あまのまやの中まらま何うら人をあひに志まら
志まら人の枕の下に海いおれど人をさる志あひに志まら
志まら志まらね思ひいおあまらうらまの枝あまらうら

おれ
めり
あね
たが
とら

寛平五年時。きついのあゝのあゝのうら。

ゆねとしかる屋よこれたまそ和たたこもゆりたがちつ

歌

あのをたのこつれをーみよまておれをよりたはあまをゆめつる

ふもまはあまうつらあまこあはたまをたつたれあうつあのかゝる

あふーげあけをたがたたぬべきあまうぐあーを人んたんらも

あふーもあまらんうこもあまをつ思ひ出とぞ消てりあしき

人はあひそ。何したよよみてはうそーまら

ゆねるあまのあまをたつれをまらめいあをらあまもあまをまらる

業平あまのあまのあまをまらまらあまをける時。あまを

まらる人はあまをみそりよあひそ。又のけりあ。人あは

あまをたつこ。思ひをまらるあひふに。女のあまより。

かこせたあまは

あま

か

かきくはんのあまよまをひまきゆたうはとい人さたあまよ

歌

あまをまのあまをたつうつうささうあまをたにうらもあまをさりけり

さよるあまをたのあまをたつうけよあまをたあまをあひつらあ

あまをたあまをたあまをたあまをたあまをたあまをたあまをた

あまをたあまをたあまをたあまをたあまをたあまをたあまをた

あまをたあまをたあまをたあまをたあまをたあまをたあまをた

あまをたあまをたあまをたあまをたあまをたあまをたあまをた

あまをたあまをたあまをたあまをたあまをたあまをたあまをた

あまをたあまをたあまをたあまをたあまをたあまをたあまをた

あまをたあまをたあまをたあまをたあまをたあまをたあまをた

か

あま

かきつねの世の人びとの志がこれにまされぬものか計ぬべしなを
あつてこそ思はむ申の志をなれまをぞとた後の志はがらみみ
つたれまをむと思ふ人のほくらにありしよとけはまをむを計し
志まをむをせうとむをむをむ人の杖よりあをむをせす
たえびやくあをむ杖のよとみみふんあをむをむをむのあのをむ
まのあ。あをむ人のいもく。あをむのあづまんがふん

よと海のよとむと人のこもむとたながれふりもいんあをむ物と
そこひまをい測やのさるる山海のあをむせよとあをむ源のたて
ねのを測むをむのいろふく思ひしむる日計のよをせむや
みちのよをむのよもむをむをむをむをむをむをむをむをむをむ
思ふまういろよせよと杖のよをむをむをむをむをむをむをむをむ
あをむのいろよつろふあをむをむをむをむをむをむをむをむをむ
海人のよをむ申の志まをむをむをむをむをむをむをむをむをむ
よと海のよとむと人のこもむとたながれふりもいんあをむ物と

よと人

よと人

よと人

よと人

いろとあをむと人よをせよとつろをむとあをむをえなくに
あつて人よとむとやあをむをむをむをむをむをむをむをむをむ
かからあをむをむをむをむをむをむをむをむをむをむをむをむ
ほをむにせむとあをむをむをむをむをむをむをむをむをむをむ
よと海のよとむと人のこもむとたながれふりもいんあをむ物と
あをむのよをむ申の志まをむをむをむをむをむをむをむをむをむ
人よとあをむをむをむをむをむをむをむをむをむをむをむをむ
いとあをむをむをむをむをむをむをむをむをむをむをむをむ
よと海のよとむと人のこもむとたながれふりもいんあをむ物と

よと人

よと人

よと人

よと人

うー

そなたがよきおめいをうひなましちのが物うらかひいこやんむ

影一に

そなたの
おめい
まうち

まぶこのたりのちよしむらいかむ人おんよまひはのこなめす

よらう
よき人

おてといも社をゆりおんをひてけり約のあーをまま人のねは

中納言源の昇のねはの。あふみのまけよけらる

時よよみこやまはるまよ

あふ板のゆはけをよまわらうと君がわまこをねりしとこね

困成

影一に

ふるさとあわぬ物うらうらあふ人のまらねあきてまねらむ

いせ
寝

山が津のなまをさくるまははらう人らまじまおとほてまねら

大どらねえまき人のかこらうの思ふことにならめらるん

あふまをのがらみもあひほをむお見てもんのだらまやねくお

よき人
しんげ

たやのちまやまける人のむまめよとまひよあひこ

あつらひなるあひだよあやのよがといひまはだいたさ

うらうとくまをなんねまおん入はなるまのいせ

老をうらすとんよねら

あふまをのがらみとんこたをめね先後ようかぶらねはあけり

おまこ
うせ

影一に

かたみこにわあさあまおれたうらうするとねはあけ物

よき人

恋歌五

あはれのみはいのまの西のたいよ種なる人よほいよ

あつてそのいひいんまらるとも月日の十日あつたに

たむむわうがかくまよなるあまはひのすなまじくえもの

もいたと又のうのまを梅のまさらまに月のかのうらう

らるねをよとましてかの西のいよいせと月のかのうらう

またあはらたたるねまよふまをまてよめら

月やあなまやむじのまらあひなうがなむらうのあま

あま
むらう

影一紙

むすぶきおこをちんま思ひ〜人よむまは〜
よたまのふたうま〜物とが〜
いづち〜あどちのいむ人か〜
久らゝの天つ〜
云と〜
若ぐら〜
うたぬの〜
あひま〜
秋あ〜
ままの〜
山〜
わひ〜

後平下
仲平下
若平下
みつ法
ゆり
よこ人
いせ
よこ人

暁の曙めをねがき〜
まら〜
うが袖〜
山のねの〜
志平た〜
あま〜
若ま〜
ゆら〜
心〜
まが〜
なま〜
こ先〜
い〜
な〜

けんが
ささ
の
原
よこ人

だまやけたるちのまに文をきいて、法りをせりたる

時こそかきゆく小聲のあさぢまのいかにひだたえげのえは法

物思ひなるあら、ものしまりまけるささよ、聖火ののえ

なまるとんこよめる

まが杖の聖とつが身と思ひををのえてもまをよこま物と

歌一うげ

水のあまの清くうたふといひまがうたがまてたのあまうた

とれまはあまそひあまうた法ひはあまをたえぬと思をあ

よ一聖火よやんこ法しうめまやくいひてあまをままてれ

世の中の人のあまのたげだのうつひあまをまよまあは法

あまこまうそあまをまてたさうつらあまをまてまてま

ままてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてま

あまのみやまてまてまてまてまてまてまてまてまてま

あまのまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてま

こまが
おね

いせ

とめり

よこ

よこ

よこ

よこ

よこ

よこ

そいとてまがかまてまてまてまてまてまてまてまてま

まてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてま

まてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてま

まてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてま

まてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてま

まてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてま

まてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてま

まてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてま

まてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてま

まてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてま

まてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてま

まてまてまてまてまてまてまてまてまてまてまてま

影一うげ

よこ

よこ

よこ

よこ

よこ

よこ

よこ

よこ

よこ

よこ

よこ

よこ

人へきびたえぬすしりたをひつともあき名ぞとたよけまよし物を
そまどどいあかこしていつがをそまことあひた人のせうくし
あかこよのいしたえぬる時まこと人のあしもあともあま里ま
まびをのし時まののいあむいづいどいのおあまこなるもむ
ううもあまそもいもむうこぞあまがまみあるがあま
クまを人まこいこまうもあまいあげりむるなれいつが
いつのまがあまをみまのまあまのほまううみはるう
あまそまあすれりしをあまも人のんをまことこまやまめ
あまそまのほのままこたのめいひまするあまのままをみ
あまよりあまをまこしてあまのやとままうまがまあま
あまははるもみづるまあまのまの林はあままびしき
林はあまのままをみまもむまあまをまのまをまのま
林はあまのまのまこまのまのまのまのまのまのまのま
あまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま

いせ
はま

おま
りせ
よん

十町
あま

林といつをよそあまをわご人のままをままのままははる
こままのままをままのままのままのままのままのまま
又まこまのままのままのままのままのままのままのま
あまこまのままのままのままのままのままのままのま
うままのままのままのままのままのままのままのま
あままのままのままのままのままのままのままのま
哀傷歌
いひうまのままのままのままのままのままのままのま
たうまのままのままのままのままのままのままのま
まのまのままのままのままのままのままのままのま
かくまのままのままのままのままのままのままのま
ちのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま
ほまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま
あまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま

あま
のう

あま
のう
あま

あま
のう

あま
のう

を懐いかしをみつともたふさあつ懐くさの山り言ふたたく
深草の群への橋しんあわがあしづらるる深草よさけ
あまの秋の夕まらうまらるる時よよみくかの
あまの秋の夕まらうまらるる時よよみくかの

懐
橋
延
か
ま
の
秋
の
夕
ま
ら
う
ま
ら
る
る
時
よ
よ
み
く
か
の

あひ志進まける人のあまの秋の夕まらうまらるる時よよみくかの
あひ志進まける人のあまの秋の夕まらうまらるる時よよみくかの

あ
ま
の
秋
の
夕
ま
ら
う
ま
ら
る
る
時
よ
よ
み
く
か
の

あひ志進まける人のあまの秋の夕まらうまらるる時よよみくかの
あひ志進まける人のあまの秋の夕まらうまらるる時よよみくかの

あ
ま
の
秋
の
夕
ま
ら
う
ま
ら
る
る
時
よ
よ
み
く
か
の

あひ志進まける人のあまの秋の夕まらうまらるる時よよみくかの
あひ志進まける人のあまの秋の夕まらうまらるる時よよみくかの

あ
ま
の
秋
の
夕
ま
ら
う
ま
ら
る
る
時
よ
よ
み
く
か
の

あひ志進まける人のあまの秋の夕まらうまらるる時よよみくかの
あひ志進まける人のあまの秋の夕まらうまらるる時よよみくかの

あ
ま
の
秋
の
夕
ま
ら
う
ま
ら
る
る
時
よ
よ
み
く
か
の

純友の夕まらうまらるる時よよみくかの

あまの秋の夕まらうまらるる時よよみくかの
あまの秋の夕まらうまらるる時よよみくかの

あ
ま
の
秋
の
夕
ま
ら
う
ま
ら
る
る
時
よ
よ
み
く
か
の

あまの秋の夕まらうまらるる時よよみくかの
あまの秋の夕まらうまらるる時よよみくかの

あ
ま
の
秋
の
夕
ま
ら
う
ま
ら
る
る
時
よ
よ
み
く
か
の

あまの秋の夕まらうまらるる時よよみくかの
あまの秋の夕まらうまらるる時よよみくかの

あ
ま
の
秋
の
夕
ま
ら
う
ま
ら
る
る
時
よ
よ
み
く
か
の

あまの秋の夕まらうまらるる時よよみくかの
あまの秋の夕まらうまらるる時よよみくかの

あ
ま
の
秋
の
夕
ま
ら
う
ま
ら
る
る
時
よ
よ
み
く
か
の

深淵のうら。他のやしまのむとてよめる。

たむら

水のちりふを流くものをもさやうまも思がみうげのちをゆるる

やま

深淵のみらどの流ふまの目よめる

深淵まを流のたまかけうじてる日の光れりまよあわぬ

ふらまのみのどの夜時ま。流人の流まよよるひるなき

流りうま流まると。深淵まを流まよまよるまよまよ

まよらまよ。ひえの山まのまよまよ。からまよまよるまよ

そのまよまよまよ。まよまよ。まよまよ。あまのまよまよ

たままよまよまよ。まよまよまよまよまよまよまよ

まよまよまよまよ。まよまよまよまよまよまよまよ

まよまよまよまよ。まよまよまよまよまよまよまよ

まよまよまよまよ

深淵のたうつ流の流人の。まよまよまよまよまよまよまよ

つ

ほらまよまよのまよまよまよまよまよまよまよ

まよまよまよまよ。まよまよまよまよまよまよまよ

まよまよまよまよ。まよまよまよまよまよまよまよ

まよまよまよまよ。まよまよまよまよまよまよまよ

まよまよまよまよ。まよまよまよまよまよまよまよ

まよまよまよまよ。まよまよまよまよまよまよまよ

まよまよまよまよ。まよまよまよまよまよまよまよ

まよまよまよまよ。まよまよまよまよまよまよまよ

まよまよまよまよ。まよまよまよまよまよまよまよ

まよまよまよまよ。まよまよまよまよまよまよまよ

の敷ふらぐ、かのよりゆうてきりたるはいでよ、つんひき
はれをゆとわさしせんざい。いとまなくあれつるもなる
とつたぐ、まなくはこよ侍りまはた。むうしとあひひや
つらぐ、よれたる

こころの
ありすけ

きみかうとむらむらまき中の秘の志けきせむとまはる
あれたりのここの。あつのはらん時よ、よれまらむれどよ
とこひはまら、かきそちりたるかぐまよ、よみまがなまらる
あとおつるはれをさ人もはえあつむ、これを後のたきまたりりま

歌一しげ

よみ
のり

あき人のやどにかなをちをまひかけて秘のこあくとはれたるむ
海つんよとむさけららんまらる雲のたはせとまやぐまう物を
武終はれこ、困倦の又のここのまきまらりけるど、いくを
くまらるで、女この男まらりまらる時よ、かのここのまき
なる。帳あかこひらのひひのあ、又とゆひはれたりりくと

よみ人
しげ

ついで、これむむじのよあ、ちのあをかん、かきはれたりりる

かぢいお家をますれぬのあつ、山の秘をあをけとまらる
とここの人のままらるけるまに、女よまらるよあまひと
して、いとまらる時よ、よみあまらる、男まらるまらる
こころよまらりつらつたあまらるあまき、麻はれんまらるけき
やすひよまらるひ侍る、林あつれたのりけあく、あ
えまらるまらるよみて、人ののあはらるまらる

よみ人
しげ

ゆみちをを風まらるせて、まらるまらる、まらる物まらるのちこらま
男まらるまらるむとてよあまらる

よみ

こころをまらるまらるものと思ひまらる、男まらるまらるねまらるまらる
やまらるまらる、まらるまらるまらる時よ、あは

よみ人
しげ

はひよひらまらるまらる、あつらまらるまらる、あつらまらるまらる、あつらまらる
かひのくまらる、あひまらるまらる、侍る人、あつらまらるまらる、あつらまらる
まらる、まらるまらる、あつらまらるまらる、あつらまらるまらる、あつらまらる

よみ人
しげ

たうまよけはむ。よみて。ふまよけをうらまて。母よこせ
よこひひく。人よけはむ。けり。うら。

かまを免のけり。ひちとを思ひに。けり。免のけり。をなをけり
雑歌上

歌一〇八

かまうへは。免をわく。なる。あまのけり。む。免のけり。のけり。けり。
思ふ。とも。ま。お。なる。免。けり。のけり。のけり。のけり。のけり。
う。けり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。
かま。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。
あま。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。
む。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。
かま。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。
よ。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。

あま
ひひ
よこ
けり

大納言ふぢり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。
よ。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。
よ。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。

あま
ひひ
よこ
けり

い。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。
い。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。
い。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。
い。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。

あま
ひひ
よこ
けり

目。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。
二。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。
二。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。

あま
ひひ
よこ
けり

か。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。
又。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。
天。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。
又。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。のけり。

あま
ひひ
よこ
けり

たがたうらむと。とぶらひてよる

ねやたまくととらむいを飛くまきうい茶てや木をけと思をん

空平は時より人のさふらひは結る。そのことしかめを

ゆせえ。たさののまのけり。木がはさまのちろーと。

まこえよ。たておほりたアなるを。花んどもひらひら

かたを。ちまよのていでい。とまうこをいさげありや

さしを。花人の中にくるまきる。

まだまのわがめやいつよよるまの夜の涙をけたまよ出ま

女どものまきうひなまきばよる。

かちこそみ山がこれのちままきんいむよまきをたりむむ

かたがうよ。人のあまよりけりる時よある。のまねを

さむらりらるを。あーたよりんとして。よみらる

探めそのよるのないうまをけどうつ里がうくま旬ひぬらる

何卒の
たのち
まうちき

と
かき

らん
びの

と
めり

歌一七

かそく出る有まよあるわあ川の山のおれこまきも角らこ

まかんだまのありはけさしけやをまきて山まら有まて

たなくこた有まめめまままこのはれを人のををるの

有まり。ろとして。れは内折植が。まうでまきたまらる

り。よる

かつ見まどうとくとあるら有ながのいたね思まひじと思んづ

池は有の見えけるを。よる

ふたのまき物と思ひを。まそこま山のまあまでいづる有け

歌一七

その何まのこまきまやまままままままままままままま

あうまうて有のりままままままままままままままま

ままきたりのまままままままままままままままま

らまら。まらまらまらまらまらまらまらまらまら

よ
ん
ん

た
ひり

は
あき

よ
ん
ん

よ。ありひら。さづりしきとして。時ふも。えまうりまごぶら
をす侍。それ。志をひたりまじ。たごのみごのめとより
とごのあとして。ふまをめてまうてまごり。あけて
こ。れ。び。あ。と。を。り。ね。く。こ。あ。ま。さ。ず。る。う。う。い

かいぬまびさ。ぬまのありとい。び。い。い。い。こ。ま。く。り。し。ま。さ。り。ね
か。ら。い

世の中にさ。ぬま。ね。あ。も。も。が。ね。ま。代。め。の。る。人。け。子。の。あ
寛平は時。さ。さい。の。え。の。あ。合。の。あ

去。る。雪。の。や。ふ。も。し。ける。か。る。山。の。う。も。ち。い。ま。り。る。り。ね
お。ち。ま。い。は。時。う。の。さ。い。ひ。ま。て。を。の。こ。ご。の。よ。お。ち。や

こ。ま。は。ひ。て。お。ち。ま。あ。た。び。あ。ま。ら。は。い。て。ま。づ。り。う。ま。つ。ま。り
かいぬとて。あ。ご。り。ま。が。身。を。せ。あ。さ。り。む。を。は。は。ら。ま。あ。ひ。ま。あ。り。物。り

歌。い。い。い
ち。ま。や。ふ。る。う。ち。は。ち。ち。あ。れ。を。い。ま。を。と。ち。ち。の。あ。ま。の。い。ぬ。ま。び

ま
さ
ら

む
ね

さ
あ
き

よ
こ
い

ち。あ。て。も。え。く。ね。り。ぬ。ほ。よ。の。春。の。め。ね。い。よ。つ。ぬ。り。み
ほ。よ。の。ね。の。め。ね。人。な。い。い。く。よ。う。あ。つ。と。を。ま。す。い。の。を
あ。は。さ。う。い。ま。の。小。ね。た。が。よ。ま。う。よ。ら。ほ。よ。か。け。た。ね。ま。た。は。む

か。つ。は。い。ま。や。は。は。く。も。も。さ。の。の。い。ま。た。て。る。ね。た。も。ら。ね。り
海。と。も。あ。る。人。よ。を。む。た。ら。さ。ご。の。ね。を。む。り。は。友。な。し。あ。り

い。い。い。の。あ。ま。い。や。あ。ひ。よ。う。く。は。は。の。清。ね。の。う。い。ま。ら。う。い。ま。ら
こ。い。は。い。の。あ。ま。い。ま。さ。せ。る。あ。ら。う。の。ほ。め。て。ゆ。る。あ。を。ち。あ。い

い。の。あ。ま。い。の。ほ。の。ま。い。も。み。ま。く。の。り。ま。い。は。い。ま。う。も
花。は。が。さ。あ。や。も。ち。く。じ。あ。ま。い。た。ま。の。あ。ま。い。た。ら。あ。ま。い。後。る

は。い。あ。ま。い。い。づ。の。あ。ま。い。は。い。時。や。ま。と。より。あ。ま。い
う。で。ま。て。よ。み。て。は。い。ち。い。ま。る

君。を。あ。ひ。ね。ま。ら。の。あ。ま。い。は。い。つ。の。た。づ。ね。れ。を。だ。あ。い。ま。い
か。い

あ
ま
い

よ
こ
い

あ
ま
い

かきつ浪たりの浪のまを松のまよこころをよちひりつせ

法
かき

たよまをまより許する時よせたる

あまをうごかふる玉座をかまを松の根とをまの車ねづゝある

あひをまきける人の住すまよりせらるまよみてきりたる

住よとあまの法ごとくまがねをねんすまきまのいよねり

法
ね

たよまをまより許する時たよのまよみてあひしてよめる

あまよりたよのまよをまあけを名まのかく許ぬ物まごまらる

法
ま

法皇のまよへまをまよとまよたまらる日法皇まよとま

とつよとを影まよとよませおひたる

あつたづのたよるにまよをまよと風まよせてあつぬ浪うとまらる

中務のまよこれまの法まよをまよとまよとまよとまよとまよと

ひる月法皇のまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと

まよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと

い
せ

かきつ浪たりの浪のまを松のまよこころをよちひりつせ

みやこまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと

ま
せ

布引のたまきまよとまよと

あまをちるに法皇のまよとまよとまよとまよとまよとまよと

乃
年

布引のたまきまよとまよとまよとまよとまよとまよと

ねまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと

ま
ひ

まよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと

たがたまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと

承
均

歌

まよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと

法
法

純つよまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと

たちねまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと

存
せ

まねりの目まよとまよとまよとまよとまよとまよとまよと

下らうこよませぬひなるよ。よれは

ぬれあきてささきる布をたなをさるまらんとやれふたかさし

たなをの

むえの山ある。かともかたをさるまらんとよれは

落たきけのさるまらぬはもをさしけしぬくまきまは

たね

れたら下をよれは

風ふけどもさるまらぬあつむをさるまらんとよれは

えつ子

田むくの時よ。女さるまらぬさるまらぬさるまらぬ

らむ下らるる。かたをさるまらぬさるまらぬさるまらぬ

をさるまらぬさるまらぬさるまらぬさるまらぬ

思ひせくんのうちかたをさるまらぬさるまらぬさるまらぬ

とよの町

屏風の急ある。さるまらぬさるまらぬ

候と免し時よ。後らうさるまらぬさるまらぬさるまらぬ

つあき

屏風の急よ。さるまらぬさるまらぬ

かまへはま田の編めさるまらぬさるまらぬさるまらぬ

おれ

雑歌下

歌一しげ

世の中いづつあつむさるまらぬさるまらぬさるまらぬ

はら

いく世もあつむさるまらぬさるまらぬさるまらぬ

あつむさるまらぬさるまらぬさるまらぬさるまらぬ

あつむさるまらぬさるまらぬさるまらぬさるまらぬ

たあ

かひのうみりはるる時。さるまらぬさるまらぬ

はらちしげり

あつむさるまらぬさるまらぬさるまらぬさるまらぬ

さるま

又屋のやすひで。さるまらぬさるまらぬさるまらぬ

た。えい。で。た。し。げ。り。さるまらぬさるまらぬ

さるまらぬさるまらぬさるまらぬさるまらぬ

小町

歌一しげ

あつむさるまらぬさるまらぬさるまらぬさるまらぬ

はら

さてよきものをとておかくさぬのむらうとてふるあはれいおまをり
世の中はうきものついでにほろびゆくよきものなる物にあはれいありけり
よはかろい夢ろうつらう現ともゆきともいづれあはれいなきまを
世の中はいつくさうが身のおもておしとせよやいともあはれいとやいは
ゆきとい物のさびしきこととわれ世のうきものいよみよらうらる
あはれいなきいづれおびくはまよふまのほろびゆく世ははらぬはれ
あはれいなきいづれおびくはまよふまのほろびゆく世ははらぬはれ
いづれおびくはまよふまのほろびゆく世ははらぬはれ
よの中いむらうとてやうかやうかおまをりおまをりおまをり
世の中といふ山はのさる本とやわれうのまのまにゆきよきも
みよし世の山のおおしよきおまをりおまをりおまをり
よよあはれいづれおびくはまよふまのほろびゆく世ははらぬはれ
いづれおびくはまよふまのほろびゆく世ははらぬはれ
あはれいなきいづれおびくはまよふまのほろびゆく世ははらぬはれ

これらあ
みこ
あはれい
いづれ
よき
いづれ

世の中はうきものついでにほろびゆくよきものなる物にあはれいありけり

おまをりおまをりおまをり

あはれい
いづれ

よのうきものついでにほろびゆくよきものなる物にあはれいありけり

おまをりおまをりおまをり

あはれい
いづれ

世の中はうきものついでにほろびゆくよきものなる物にあはれいありけり

おまをりおまをりおまをり

あはれい
いづれ

よのうきものついでにほろびゆくよきものなる物にあはれいありけり

おまをりおまをりおまをり

あはれい
いづれ

世の中はうきものついでにほろびゆくよきものなる物にあはれいありけり

おまをりおまをりおまをり

あはれい
いづれ

つらな度いと痛の山もさへしつゝあはれひきよせられたる。つ
あいなやこのたのみさうぞよき世さうぢや人のいひあま
あはれよりあはれいづよのあまきやなれん人のあはれさき
あはれよりあはれいづよのあまきやなれん人のあはれさき
あはれよりあはれいづよのあまきやなれん人のあはれさき

あはれ
あはれ
あはれ

あはれよりあはれいづよのあまきやなれん人のあはれさき

あはれ

あはれよりあはれいづよのあまきやなれん人のあはれさき

あはれ

歌一七

あはれよりあはれいづよのあまきやなれん人のあはれさき
あはれよりあはれいづよのあまきやなれん人のあはれさき
あはれよりあはれいづよのあまきやなれん人のあはれさき
あはれよりあはれいづよのあまきやなれん人のあはれさき

あはれ

あはれよりあはれいづよのあまきやなれん人のあはれさき

あはれ

あはれよりあはれいづよのあまきやなれん人のあはれさき

あはれ

あはれよりあはれいづよのあまきやなれん人のあはれさき

あはれ

あはれよりあはれいづよのあまきやなれん人のあはれさき

あはれ

あはれよりあはれいづよのあまきやなれん人のあはれさき

あはれ

あはれよりあはれいづよのあまきやなれん人のあはれさき

あはれ

あはれよりあはれいづよのあまきやなれん人のあはれさき

あはれ

あし引の 山こゝろの ちがくねく たちをいそろせ
きれよりも あひこころいん ちよと出バ 人志をねびみ
さみぞをの ゆたよあまじぶ せりりて ありれくや
あけきゆり せんまぶあまよ ままよいで ちやまこくを
ちろたんの 衣の袖より かくちの ちあひけぬべく
思へばも あふたぢうれぬ ちろ ちあ よそまも人ふ
あをれとちりんを

ふる歌たてまはすし時のちろくろのちのたながうと

法
由

ちちあぶる 祚のこよし王 くら井の せよまたえは
あまじぶの ちろたの山の ちあ ちあ 思ひみくせそ
さみぞをの ちろくろちろよ さよ文て ちまをくまじけ
たごごごに たまもねまて からあき ちのたの山の
りみぢをを ちてのこ志のふ 祚ふ月 志まじくく
ちのよれ ちをまぶれち ちろ ちあ ちまをえうくま

とちとふ とちとふつ ちをれてふ ちをよむつ
ちよとふ ちよとふ 世の人の 思ひまをがの
あまじぶの ちゆる思ひも ちあすて ちろくろちあご
ふちこちも ちまじくちんを ちちくまの ちあのをごごに
ちまじぶの ちせうくちま ちまじけ ちまはくちと
いせのうこの ちのちちちひ ちあひあつめ ちねとちまじと
たまのをち ちかまごころ ちあひあひ ちああしたまの
ちまじぶ ちまやまのち ちろくち ちろくち
ちまじぶ ちまじぶ ちまじぶ ちまじぶ
いあまあひ ちまじぶの ちまじぶ ちまじぶ

ふる歌うこふちまじぶたてまはすし時のちろくろのち

ちまじぶの ちまじぶの ちまじぶの ちまじぶの
いあまあひ ちまじぶの ちまじぶの ちまじぶの
あまじぶの ちまじぶの ちまじぶの ちまじぶの

右
券

さぐりはるる歌

七條后うせぬひまらる後よみみま

おははみ お料のこまきる ちやのちわ 逢つるまきり

いせのあまも ふねたがうしき ちち一毛 ようむろくぬく

かぬもたれ あまごのそをの くれきぬの くれろがふるの

まぬねそ 林のゆみむと ちぢぐも おめがちりく

ころ進をを たのむかぢなく かりそを とまるとのそ

まよとくも ちたふきと庭子 むねもて そろまきねる

ちつろ里れ ちまきつりつ 上をよこそまら

旋歌

歌一しげ

おははれちまらるるま物まらぬれそにちちくはるる何のそま

うらら

まよとくまらぬれちまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ

しげ

歌一しげ

まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ

まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ

旋歌

歌一しげ

まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ

まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ

まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ

七月二日。たかまこのまらぬまらぬ

いはしりくとおまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ

だいらしげ

まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ

まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ

まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ

しげ

しげ

しげ

しげ

しげ

しげ

杖を擡のちまて今をれば女は若きまのまがごとくみえがねき
花とこそとむとまはれが女はまじうとあるまはれ名は紅あられ

寛平治時。まきさの文の歌合のうし

杖風よほこらびねじ屋をうまはれまきさるてふまじりぐはさく

むね
やれ

あま。ままたむとくける日とわらまのちあらくより風

の。ちと吹くしほるまきさ。そのとれまきさ。まてはくしりる

まきさぐるまきのわりのをらまきさる垣よりとむいちまける

ふら
やぶ

歌しつば

いとくみふ里あり恋の神さびくたるとまはれいぞねりまはる

よこ
しつば

枕よりあまより恋のせめくまをせんくまきさどまきさよまは

恋しまきさかまきさくことあまとまけたまきさをねまきさくちさ

あまねやまきさくことあまとまけたまきさをねまきさくちさ

みまの山のまきさくことあまとまけたまきさをねまきさくちさ

あまのやまきさくことあまとまけたまきさをねまきさくちさ

ふ下の花のちまね思ひよのえをのえがまきさるねむりかみりせ

まの
と

ほひこまきさくことあまとまけたまきさをねまきさくちさ

たの
わらこ

人はあまむつまのあまきさの思ひまきさくむねよりまきさくちさ

小ま
ち

寛平治時。まきさの文の歌合のうし

まきさるたまきのわりのをらまきさる垣よりとむいちまける

かき
うせ

歌しつば

思ふまきさくことあまとまけたまきさをねまきさくちさ

よこ
しつば

まきの花のちまね思ひよのえをのえがまきさるねむりかみりせ

まの
と

林のまきさくことあまとまけたまきさをねまきさくちさ

まの
と

探のまのひとまきさくことあまとまけたまきさをねまきさくちさ

まの
と

かみまねのまきさくことあまとまけたまきさをねまきさくちさ

まの
と

あまとあまの思をまきさくことあまとまけたまきさをねまきさくちさ

まの
と

思ふてふ人の心のまきさくことあまとまけたまきさをねまきさくちさ

まの
と

歌一七

梅のさねさ死ての後のこゝろをさねがやま死物とのみ人のいりや

法皇のしほまかちへはした里なる日。猿山のうひり

さねがぶといふことと歌まをよませおひらる

まがらまますしらすまをさねの山のうひあるままのあらぬ

歌一七

世といひ木ののこしにさよりてうはがしめおれあまのまねく

大歌一所法歌

かほるふびのうら

あつしきまをれまふかつこをまをさかひてたのまをつめ

後記 疎日本紀のいはれうらまのまよらばよまをよ

ふるまやまをまひのうら

志のこゆかづき山まふるをこのすれく時かくなのやあるりか

あふこふま

よま

らね

は

とにさよりあきたちをれをさねのまをたつをさるるねこのよ
こづきまのまのやうこまねとわれねてのたけのまのまのうら
志を山出ち出てこねをさゆひのまをたつるたかしのふ
ねあまびのうら

神がまのこむらの山のさくらをの神のまをまをまげまおひら
をねやぶかけどかきせぬさうまをたのたかさうゆまを神のまね
まねまののおねのまのまねと人まをまがま山つうまかよ
こまのあまねまをまをまをまをまをまをまをまをまをま
みちのくはあまのまのまをまをまをまをまをまをまをま
まをまのまのまをまをまをまをまをまをまをまをまをま
まをまのまのまをまをまをまをまをまをまをまをまをま

うひがもさやまらんがれ茶くよこをささるさめの中少
甲をたがねをたがう山ごうを風と人まがのやあづつてや草

いせうこ
さよの備よりささうかやいあるたうのありあはれと結てさ
その答茂の中川里のうこ
ちちやぶるかものやられむれ小ね茶、けをともさるりさうらど

家^ニ孫^ス氏^ト之本^ニ正^ニ書^入以^テ書^ヲ減^タ分^別書^定ヲ
卷第十 物名部

そまくのいよ本むくりおしりの山のやままたよびとよむさ里
在^ニ新^下。さ^上探^上
かろりてもさよさうたまのまをささんかろりのほとあまふく物を
さうごまの本支別^下

あき

つがき

かちん

くまのちま

あし時こひつとまほらぐれのかのうげまのめんこもはうぬ 黄之

悪草、刺身^下

かまのね こやうこま

かまのねて身とまよりまかかむいこまをまののいられまうらま こまら

からこと、清^下

そまのあ あまこ

らまあまどばま免とのこどのがれゆらまのあをたつゆのふくまよ あや

このあひ、あのをのまらこの、そ免どのよりあまこまう

つまあふらら時まよまある

桂^下

卷第十一

かく山のそ友の根志のまこふるまの^下

りかんをささるんいおねあなまうらあまかこらばりまう

文粹無下悲哉二字

是相分所以隨民之欲擇士之才也自太津皇子之初作詩賦詞人才子慕風繼塵移彼漢家之字化我日域之俗民業一改倭歌漸衰然猶有先師柿本大夫者高振神妙之思獨步古今之間有山邊赤人者並倭歌仙也其餘業倭歌者綿綿不絕及彼時變澆漓人貴奢淫浮詞雲興艷涼泉涌其實皆落其花孤榮至有好色之家以此為花鳥之使乞食之客以此為活計之媒故半為婦人之右難進大夫之前近代存古風者絕二三人而已然長短不同論以可辨花山僧正尤得歌體然其詞花而少實如圖畫好女徒動人情在原中將之歌其情有餘其詞不足如菱花雖少彩色而有薰香文琳巧詠物然其體近俗如賈人之著鮮衣宇治山僧喜撰其詞華麗而首尾淳滯如望秋月遇曉雲小野小町之歌古衣通姬之流也然艷而無氣力如病婦之着花粉大友黑主之歌古猿丸大夫之姿也頗有逸興而體甚鄙如田夫之息花前也此外氏姓流聞者不可勝數其大底皆以艷為基不知歌之趣者也俗人爭事榮利不用詠倭歌悲哉悲哉雖貴兼相將富餘金錢而骨未腐於土中名先滅於世上適為後世

一本顯下有伏惟二字

被知者唯倭歌之人而已何者語近人耳義憤神明也昔平城天子詔侍臣令撰萬葉集自爾以來時歷十代數過百年其後倭歌棄不被採雖風流如野宰相雅情如在納言而皆以他才聞不以斯道顯上陛下御宇于今九載仁流秋津洲之外惠茂筑波山之陰淵變為瀨之聲寂寂閉口砂長為巖之頌洋洋滿耳思繼既絕之風欲興久廢之道爰詔大內記紀友則御書所預紀貫之前甲斐少目凡河內躬恒右衛門府生壬生忠岑等各獻家集并古來舊歌曰續萬葉集於是重有詔部類所奉之歌勒為二十卷名曰古今倭歌集臣等詞少春花之艷名竊秋夜之長况哉進恐時俗之嘲退慙才藝之拙適遇倭歌之中興以樂吾道之再昌嗟乎人九既沒倭歌不在斯哉于時延喜五年歲次乙丑四月十八日臣貫之等謹序

文粹哉作乎

かんれいといふに乃くんれい又書物とてめ又字のきつひた
 古今集の一本乃て字一もよふて下やまうとあるまは
 別去あつてめ或はいつまの布もすくかゝるよりのまゝなりと
 かゝはるにあらはれぬ
 こゝにひけ本あつてに本にあらはれぬと印も志らぬるま
 子あとの傍あつてまんよみやましく心もゆりつ支流よとて
 有れは清みこりををもとてあつていさかすも一平
 をもあつてあつたりと余り余をこあるとつひあ
 んもつらうつはらう南

蚊田倉生

延喜五年四月十八日出版
 明治十八年九月廿日反刻御届

奉勅 選者故人 紀 貫 之

校訂者故人 蚊田倉生

大坂府平民

原版主 岡田茂兵衛

東京府平民

出版人 江島伊兵衛

日本橋區通四丁目十番地

